

## 日本とかかわる 19 世紀中期以前の台湾近代医事の変遷

### ——台湾大学医学部と国防医学院を中心に

王 敏東

#### 1、はじめに

台湾における近代的な医療体系は、主に日本領有の半世紀間（1895～1945）に作られた。そのような組織の具体的なものとして、現在とくに台湾大学医学部の前身である台北帝国大学医学部が注目されている。終戦後、国民党政府の中国大陸からの来台に伴い、日本からの影響が意識的に抑えられた。抑えられていた医学関係のものは、医療体系をはじめ、医学教育制度、さらに医学用語にまで、多面にわたっている。日本の医療体系交代するものとして代表的なものは、何と言っても、軍事システムの一部である国防医学院<sup>1</sup>である<sup>2</sup>。

本稿は台湾の日本領有が終わった頃、日本人によって創立された台北帝国大学医学部と、国民党政府軍制の国防医学院の歩み、そして両系統が触れ合う様子を検討するものである。また、国防医学院については中国大陸から台湾に移転されるまでの間の日本とのかかわりについても触れる<sup>3</sup>。

#### 2、台北帝国大学医学部から台湾大学医学部への歩み

日本軍が初の植民地である台湾で始政式が行なわれた 1895 年 6 月 17 日の 4 日後、主に日台間における「台湾主権」を巡って発生した流血事件に応じ、直ちにどうしても必要な病院――

---

<sup>1</sup> 中国語「医学院」は日本語の医学部に相当。大学名に「～医学院」となっていれば、医科大のことである。

<sup>2</sup> 戦後、台湾における医療体系の 2 大系統は日本人によってたてられた医療体系を継いでいる台湾大学医学部と、中国大陸から来ており、国防医学院を含む軍系のものである。関連のことは鄭（2005）も触れている。

<sup>3</sup> 両系統における重要な事項は文末「付録」の形で提示する。日本とかかわる部分は筆者により網掛けを施している。

台湾病院の運営が始められた。日本の台湾統治が徐々に安定しつつあるのに従い、1898年に台湾病院は台湾総督府台北医院となった。一方、医学教育の開始は1899年の台湾総督府医学校で、この学校は1919年に台湾総督府医学専門学校、1922年に更に台湾総督府台北医学専門学校、と改称された。一方、1928年に設立された台北帝国大学においても、医学部は1935年に開設された。翌1936年には台湾総督府台北医学専門学校の校地を使用するようになり、1938年に帝大自身の付属病院<sup>4</sup>が成立した。

このように、台湾大学医学部は、病院という実際の需要に応じ発展してきたものである。日本人の手によって作られ、日本統治下で成長してきた台湾大学医学部は、当然最初は日本の医療体系を継承していた。

### 3、国防医学院及び付属病院の三軍総医院

国防医学院の前身である北洋軍医学堂は、成立を清末の1902年<sup>5</sup>に遡ることができ、軍制高等教育機構において最も歴史が長いものである。この北洋軍医学堂は、袁世凱<sup>6</sup>により作られ、列強の侵華のもとで清が振作しようとした一連の対策の一環として生まれたもので、中国における最初の軍事医学教育機構でもある。4年後の1905年に陸軍が継ぐことになったため、陸軍軍医学堂と改称された。また、35名の一回生が卒業したのもこの年だった。1911年に同系統の付属病院が成立され<sup>7</sup>、これで医学教育、実験、臨床実習という三拍子がそろった。清から中華民国に変わった1912年に陸軍軍医学校と改称された<sup>8</sup>。1934年には、当時の学長である劉瑞恆氏が英米の医学教育制度を推進するようにした。1936年には、海軍と空軍に派遣される卒業生がいることより、軍医学校と改称された。1937年に蒋介石氏が学長を兼任するようになった。1937年より戦争のため、校舎が広州、桂林、安順など転々と移転させられたが、その際実験室や図書館などの施設の修整、教学病院や臨床教学センターという人員養成の機構も必ず設立するようにされていた。戦争が終わった数年後の1947年には、軍医学校、戦時衛生人員訓練所などの13機構が軍医学校と上海で合併され、国防医学院と称するようになった。1949年に国防医学院

<sup>4</sup> 台湾では hospital のことを医院といい、日本のような規模などにより病院か医院の区別でなく、「病院」は用いられていない。本稿では病院名などの固有名詞の場合に限って「医院」を使う。

<sup>5</sup> 国防医学院院史編纂委員会（1995）『国防医学院院史』。ただし、国防医学院のホームページには該当校の歴史が1901年より開始されたことになっている。

<sup>6</sup> 初代の実質の責任者（医学専門の方）はイギリス留学の徐清華氏と伍德連氏である。

<sup>7</sup> 国防医学院のホームページによる。ただし、国防医学院院史編纂委員会（1995：3）では1912年と示されている。

<sup>8</sup> 「学堂」は「学校」より古い呼び方である。詳しいことは別の機会に譲りたい。

は共産主義政府に負けた国民党政府に従い、台湾に移転された。また、1979 年に三軍総医院<sup>9</sup>が国防医学院付属病院（教学病院でもある）として国防医学院に配属されるようになってきている<sup>10</sup>。

このように、国防医学院は前朝清の末期に、西洋外敵と対抗するための医学教育から発足したものであることが分かった。その系統は主に中国人により直接西洋医学を受けたものである<sup>11</sup>。

#### 4、台湾大学医学部と国防医学院の接触

2 と 3 では、19 世紀末・20 世紀初頭、外敵や戦争のために創立された 2 つの高等医学教育機構の歴史を紹介した。この 2 つの医療体系はそれぞれ中国大陆と台湾で創立されながら、終戦後台湾で、同一の政治体（国民党政府）の統治により、やむを得ず接触・融合するようになってきた。これは医学教育体系だけでなく、言葉にも反映されている<sup>12</sup>。

終戦後、国民党政府に従い中国大陆から台湾にやってきて、台湾大学医学部に編入させられた医学生がいた。当時台湾の医学レベルは中国大陆より高かったという<sup>13</sup>。台湾に“亡命”した国民党政府のもとで振興を図ろうとした国防医学院は、当時の学長の林可勝氏によって、台湾大学医学部及び付属病院と、校舎などの資源を共用することが提案された<sup>14</sup>。が、台湾大学医学部学部長の杜聡明氏<sup>15</sup>に拒否された<sup>16</sup>。しかし、両機構は互いに相手を見習いあった<sup>17</sup>。

一方、“よそから来た”ものの、政治の実権を握った国民党政府は到底強勢で、“地主”の台湾大学医学部も“元祖”の日本の制度を放棄するようになった。

<sup>9</sup> 1967 年に創立（三軍総医院ホームページ <http://www.tsgh.ndmctsgh.edu.tw/today.asp>）。

<sup>10</sup> 国防医学院図書館医学人文資源網 <http://library.ndmctsgh.edu.tw/medhum/medhum-mil.htm#edu> による。ただし、国防医学院院史編纂委員会（1995：590）では 1978 年と示されている。

<sup>11</sup> 日本からの影響もあるが、少ないと思われる。たとえば、1908 年に日本医学学者を教師として迎え、日本留学経験者を学長（李学瀛（1912～1915）、戴棣齡（1922～1923）、嚴智鍾（1932～1934）など）としたことがある（国防医学院院史編纂委員会（1995））。詳細は文末の「付録」を参照。

<sup>12</sup> 当時、言葉による医療上の衝突になったことは多くあった。詳細は鄭（2005）、杜（1973）などが詳しい。

<sup>13</sup> 莊（2002）。

<sup>14</sup> 鄭（2005：278）。

<sup>15</sup> 日本の医学博士号（京都大学）を取得した最初の台湾人で、日本統治時代に台北帝国大学医学部の教授にまでなった唯一の台湾人でもある。さらに（台北帝国大学が）台湾大学（と変わった）初代の医学部部長である。

<sup>16</sup> 関連のことは莊（2002）、宋（2003：184）、鄭（2005：278）などが詳しい。が、国防医学院院史編纂委員会（1995）には触れられていない。

<sup>17</sup> 宋（2003）。

以下、この2つの系統の接触が、現在の台湾の医事（とくに大学における医学教育と、言葉）にどう表現されているかを検討していく。

#### 4. 1、大学における医学教育及び付属病院の制度

台湾大学医学部教授の宋<sup>18</sup>（2003：200）は、1949年に台湾にやってきた国防医学院の、アメリカ式の医療制度や診療方式のことを羨ましがって回想している。

台湾大学医学部の方は日本式の呼称である“学部”を“学院”に改称、講座制度を学科にした<sup>19</sup>。さらに、1951年にアメリカの援助を受け、デューク（Duke）大学医学部学部長らの協力により、当時のデューク大学の医学課程に基づき台湾大学医学部のカリキュラムを調整した<sup>20</sup>。

一方、1932年に国防医学院（当時陸軍軍医学校）の学長であり、日本にも長く在住した嚴智鍾氏は1947年1月より台湾大学医学部教授兼細菌科主任、同年8月に兼台湾大学医学部代理学部長（杜聡明氏に継ぐ台湾大学医学部2代目の学部長）となり、医学部制度の革新に力を入れた。1949年に、国防医学院の台湾移転に伴い、医学生物形態科細菌学組教授として国防医学院に戻った。1952年にまた台湾大学医学部教授、再び医学部の事務の仕事に携わるようになった。氏はまた1963年に日本医学年會に出席した記録も残されている。

付録でも提示しているように、嚴氏は13歳の時より中国大陸から渡日し、その後台湾に移転される前の国防医学院に勤務していた<sup>21</sup>。こういう日本とのかかわりにより、嚴氏は終戦後、長く日本に支配されていた台湾の医学との架け橋として、国民党により台湾大学医学部へ赴任させられたと思われる<sup>22</sup>。

#### 4. 2、言葉

敗戦後暫くは、日本人全員が日本に帰ったわけではなかった。台湾人が台湾大学医学部学部長になった場合でも、実際の医学教育上の需要などにより、森於菟氏、金關丈夫氏（ともに解剖学専門）、小田俊郎氏（内科）、酒井潔氏（小児科専門）、森下薫氏（寄生虫学専門）、上村親一郎氏（耳鼻咽喉科）などの日本人が留任して、続けて台湾大学で日本語で医学教育を行

<sup>18</sup> 内科。2001年に「総統獎」（大統領賞）受賞。

<sup>19</sup> 莊（2002：359）、鄭（2005：284、289）。

<sup>20</sup> 宋（2003：164）。

<sup>21</sup> 他に北京協和医院、衛生署にも勤務していた。

<sup>22</sup> 鄭（2005）の、台湾大学より嚴智鍾氏を国防医学院に支援に借りたような言い方が嚴密に言えば正しくない。ちなみに、鄭（2005）には嚴氏の名前の「鍾」を「鐘」とされており、国防医学院の資料（校史やホームページなど）と異なっている。

っていた<sup>23</sup>。しかし、これは終戦後における過渡的な現象に過ぎなかった<sup>24</sup>。1947 年に、日本人教師らはとうとう日本へ帰ることになった<sup>25</sup>。さらに、1949 年に台湾大学の学長傅斯年氏が「台湾光復、業已三年有半、本校學術用語有時不得已延用日本文、尚有其故、當逐年改革。至於諸生入大學有年、情意之傳達、實無用日語作為壁報或傳單之必要。…自即日起、除學術用語得于文中引用日語外、凡有以日文壁報或宣傳者、限三日內自行除去…其為廣告性質用日記者、亦須預得訓導處許可方可張貼。」を公布し<sup>26</sup>、日本語の使用は學術用語の文中における引用だけに限られ、日本語による基本的な交流は正式に禁じられるようになった<sup>27</sup>。

異なった言葉間の交流において、音韻、文法などと比べると、語彙が最も他の言語に入り込みやすい部分である。日中両言語における医学関係の語彙についてみると、古来中国漢方の語彙が中国から日本へ入ったのに対して、西洋医学に関する語彙は日本から中国へ入ったものが多い。後者の中には新漢語と呼ばれるものがあり、いわゆる逆輸入の形で中国語における外来語の一部となっている。そのようなものに、たとえば、「結核」「黒死病」「癌」「流行性感冒」「免疫」「扁桃腺」「甲状腺」「伝染病」「衛生」「細胞」「聴診器」<sup>28</sup>などがあり、すでに中国語に浸透し、外国語由来の言葉と一般に意識されていない。これらの言葉は現在中国大陸でも台湾でも広く用いられている。

一方、国防医学院系統の三軍総医院や、榮民総医院<sup>29</sup>では今でも中国における医者 of 古い呼称である「大夫」を援用することがある<sup>30</sup>。それに対して、台湾大学医学部付属病院では医者 of こ

<sup>23</sup> 莊 (2002 : 347, 352) や、台湾大学医学部の各科のホームページにより整理すると、詳細は以下のようである。基礎：森於菟、金關丈夫 (解剖学)；細谷雄二、竹中繁雄 (生理学)；森下薫 (寄生虫学)；薄田七郎 (病理学)；大瀬貴光 (公共衛生)；臨床：小田俊郎、桂重鴻、柳金太郎 (内科)；澤田平十郎、河石九二夫 (外科)；酒井潔 (小児科)；真柄正直 (産婦人科)；茂木宣 (眼科)；上村親一郎 (耳鼻咽喉科) となっている (以上敬称略)。

<sup>24</sup> 当時日本教師の留任は台湾の医学教育のためであった (杜 (1973)、莊 (2002)、鄭 (2005) など) が、中国大陸から来た教師や学生には言葉の壁により不都合のことであった。

<sup>25</sup> 日本人教師たちの帰国した理由については、莊 (2002) の二二八事件 (1947 年 2 月 28 日に台北市で起こり、その後台湾全土に広がった大規模な本省人 (台湾人) と中国大陸から来た外省人の争いである) による恐怖や不安によるという説と、帰らせたという説がある。

<sup>26</sup> 莊 (2002)。

<sup>27</sup> 莊 (2002 : 358)。

<sup>28</sup> 上述した「結核」などの語における語史 (語誌) や日中語彙交流の様相については参考文献にあげた沈 (1994)、王・許 (2005)、王 (2006, 2008)、王・蘇 (2006) などが詳しい。

<sup>29</sup> 専ら退役軍人 (台湾で「榮民」) のために設立された病院である。台北市をはじめ、高雄、台中、桃園、嘉義など全台多くある。ちなみに、現在台湾で最も規模の大きい台北榮民総医院は 1958 年に

とが「先生」（発音まで日本語のセンセイ）とも呼ばれている<sup>31</sup>。また、「医局」という言葉は台湾大学医学部付属病院で使用されている<sup>32</sup>が、中国大陸から来た国防医学院系統では使われていない。なお、医学部に在学中の学部生を意味する日中同形語「医学生」は台湾の、台湾大学医学部、国防医学院や、私立でトップの長庚大学医学部などを含む医学界で広く用いられているが、一般人には馴染みのない言い方である<sup>33</sup>。従って、「医学生」という言葉は台湾の医学界の間の職業語に近いものだと言えそうだ<sup>34</sup>。

このように、今でも、台湾大学医学部の方では、医療関係者の用いる言葉に関して日本からの影響を強く受けていることが分かる。

## 5、おわりに

本稿は、日本とかわる台湾における医事の変遷、とくに第二次世界大戦が終わった1945年前後を境目とし、現在台湾の二大医療体系である台湾大学医学部と国防医学院がそれぞれ歩んできた過程及び両者の接触などについて論じてきた。台湾大学医学部は日本人により病院という実用面からスタートし、国防医学院は現代西洋医学教育の需要を痛感した清によって創立され発足したものである。前者は完全に日本医療系統そのものであり、後者はごく少数日本留学のメンバーが点在されていたぐらいで、基本的には西洋医療体系を中国人が直接受け入れたものである。両系統は終戦するまでの四十数年間、台湾海峡を隔てて各自に発展していた。が、日本、中国大陸、台湾のいずれにとっても運命的な1945年にいたり、政権の転移に伴い、台湾大学医学部も国防医学院も台湾の医事に大きな変化を与えた。日本由来の医療系統も、中国大

---

創立された。設立計画の段階より主に国防医学院の人員が携わっていた（国防医学院院史編纂委員会（1995：569～570））。1974年に、榮民総医院の医学教育機構として、さらに陽明医学院（現在陽明大学）を創立した。いずれにせよ、台湾における軍系の病院はいずれも中国大陸からやってきた系統である。

<sup>30</sup> たとえば、『紅樓夢』（第五十一回）「我叫人請了大夫，悄悄的從後門進來瞧瞧就是了。」とある。中国大陸でも「大夫」が使われている。

<sup>31</sup> もっとも、「医師」や「医生」が普通である。

<sup>32</sup> 非正式な場合に用いられており、決まった空間・場所ではなく、グループやそのグループに属されているメンバーなどを指すことが多い。

<sup>33</sup> 一般人の「医学生」の使用状況については筆者により2008年7月下旬に37人にアンケート調査をした。回収した全員（8人）は「医学生」という言葉は知らないである。そのうち4人は「聞いたら何となく医学部の学生だろうと推測できるが、自ら使用することはない」という注記をした。

<sup>34</sup> 日本語起源の言葉かどうか、もしそうだとしたら、それが中国語に借用された過程については再考する必要がある。それについては別の機会に譲りたい。

陸よりやってきた国防医学院系統と接触するようになった。両系統を合併するという話があったが、キーパーソンの杜聰明氏の反対で、実現に至らなかった。しかし、政治力の介入で、医療体系、言葉遣いなどを含む日本からの影響は意識的に薄められてきた。とくに医療制度というような形式上のは台湾では現在完全に西洋化（アメリカ化）されてきている。ただし、言葉の面においては、今でも医学関係の言葉に日本語由来の中国語はかなり多く存在している。そのような言葉は、19 世紀末・20 世紀初以前すでに中国語に借用されていたもの（「結核」「扁桃腺」などのいわゆる新漢語）と、日本の統治により先に台湾で用いられたもの（「先生」「医局」「医学生」など）に、大きく分けられる。後者は現在台湾での使用において位相の差がみられる。今後、台湾大学と国防医学院に所蔵されている貴重な資料を利用したうえ、より広範な調査研究をする価値があると考えられる。

#### 参考文献

- 杜聰明 (1973) 『回憶録』台北市：杜聰明博士獎學基金管理委員會（杜聰明著；張玉法・張瑞德主編 (1989) 『回憶録』台北：龍文出版)
- 沈国威 (1994) 『近代日中語彙交流史——新漢語の生成と受容』日本：笠間書院
- 国防医学院院史編纂委員会 (1995) 『国防医学院院史』台北：国防医学院
- 小田俊郎 著・洪有錫 譯 (2000) 『台灣醫學 50 年』台北：前衛
- 小田滋 (2002) 『堀内・小田家三代百年の台湾：台湾の医事・衛生を軸として』東京：日本図書刊行会
- 莊永明 (2002) 『台湾医療史』台北：遠流出版
- 鄺翔 編 (2003) 『国防医学院院史 続編』台北：国防医学院
- 宋瑞樓 (2003) 『論医学教育』台北：橘井文化事業
- 王敏東・許巍鐘 (2005) 「「扁桃腺」という言葉の成立について 付：関連語彙にも触れながら」『国語語彙史の研究』二十四、pp.320-336、日本：和泉書院
- 王敏東・許巍鐘 (2005) 「新漢語「甲状腺」の成立について—付：関連の語にも触れながら—」『国際シンポジウム比較語彙研究Ⅷ・語彙研究セミナーⅤ』、pp.125-132、台北：台湾大学
- 鄭志敏 (2005) 『杜聰明與臺灣醫療史之研究』台北：國立中國醫藥研究所
- 王敏東 (2006) 「医学名詞「結核」小考」『語文建設通訊』83、pp.49-52、香港：中国語文学会
- 王敏東 (2006) 「從“免疫”一詞探討日據時期臺灣文獻在借自日語的外來詞上所扮演的角色」『語文建設通訊』84、pp.42-45、香港：中国語文学会

- 王敏東 (2006) 「新漢語の中日交流について—公衆衛生に関する幾つかの名称が台湾における使用状況を中心として—」『漢字訳語と漢字文化諸言語の近代語彙の形成』国際シンポジウム、pp.62-69、ソウル
- 王敏東・蘇仁亮 (2006) 「從「瘟疫」/「黑死病」到「鼠疫」—中日疾病名稱考源—」『或問』11、pp.77-85、日本：近代東西言語文化接触研究会
- 王敏東・蘇仁亮 (2006) 「「インフルエンザ」及び「流行性感冒」の語誌—19世紀末における日中語彙の交流例として—」『日本学刊』10、pp.81-91、香港：日本語教育研究会
- 李東華 (2006) 「光復初期 (1945-50) 的民族情感與省籍衝突——從臺灣大學的接收改制做觀察」『臺大文史哲學報』65、pp.183-221、台北：台湾大学  
[http://homepage.ntu.edu.tw/~bcla/e\\_book/65/65\\_06.pdf](http://homepage.ntu.edu.tw/~bcla/e_book/65/65_06.pdf)
- 王敏東・蘇仁亮 (2007) 「日中同形語に関する一考察—医療機器の名称を例として—」『国語語彙史の研究』二十六、pp.285-302、日本：和泉書院
- 顏裕庭 (2007) 「110年來的台大醫學院」『楓城新聞與評論』167、台北：台湾大学  
[http://www.mc.ntu.edu.tw/epaper/167/epaper\\_167\\_61.htm](http://www.mc.ntu.edu.tw/epaper/167/epaper_167_61.htm)
- 王敏東 (2008) 「台湾の医学に影響を与えた日本人—耳鼻咽喉科の場合—」『日本医史学雑誌』Vol.54, No.3、日本：日本医史学会
- 王敏東 (2008 予定) 「“癌”にまつわる言葉とその推移—日治時期の台湾における日本語資料を中心として—」『国語文字史の研究』十一、日本：和泉書院
- 国防医学院 <http://www1.ndmctsg.edu.tw/history/fla951108.swf>  
国防医学院図書館医学人文資源網  
<http://library.ndmctsg.edu.tw/medhum/medhum-mil.htm#edu>
- 三軍総医院 <http://www.tsgh.ndmctsg.edu.tw/today.asp>
- 台湾大学医学部 <http://www.mc.ntu.edu.tw/main.php?Page=A2b2>
- 台湾大学医学部付属病院 <http://ntuh.mc.ntu.edu.tw/E-Hospital/NTUH.HTM>

謝辞：本稿の作成にあたり、長庚医院の蘇仁亮医師、三軍総医院の詹徳全医師、台湾大学医学部付属病院の許巍鐘医師より多大な教示をいただいた。記して感謝する。



付録<sup>35</sup>

台湾 (台湾大学医学部)	年	中国大陸 (国防医学院)
・台湾病院が運営。	1895	
・台湾病院は台湾総督府台北病院と改称。	1898	
・台湾総督府医学校により医学教育を開始。	1899	
	1901	・北洋軍医学堂が創立。
	1905	・陸軍が継ぎ、陸軍軍医学堂と改称。 ・35 名の一回生が卒業した。
	1908	・日本医学学者を教師として迎えた。
	1911	・同系統の付属病院が成立 <sup>36</sup> 。
	1912	・陸軍軍医学校と改称。 ・一回生の李学瀛 (日本留学) が学長。
	1917	・北京の校舎を日本人のデザインによって建築。
・台湾総督府医学専門学校と改称。	1919	・日本に留学生を派遣。そのうちの戴棣齡 (長崎医科大卒、日本陸軍軍医学校研修) が内科精神病学を教授。
	1920	・戴棣齡が学長 <sup>37</sup> 。
・台湾総督府台北医学専門学校と改称。	1922	・政治、軍閥などによる不安定の状況のため、戴棣齡が学長を辞めた。
・台北帝国大学が成立。	1928	・戴棣齡が再び学長。
	1930	・学長戴棣齡は高齢を理由で辞任。
	1932	・嚴智鍾 (1902 年に 13 歳の時日本へ行き、1912 年東大医学部在学中の時辛亥革命のため帰国、後日本に戻り東大医学部卒、暫く日本で伝染病・細菌学の研究をしていた) が学長。
	1934	・嚴智鍾の代わりに劉瑞恒が学長に。 ・劉瑞恒により英米の医学教育制度を推進するようにした。 ・日本語の代わりに英語を教授 (一年生)。
・台北帝国大学医学部が開設。	1935	・日本留学で、博士号を持っている黎啓康を

<sup>35</sup> 表内敬称略。<sup>36</sup> 同注 7。<sup>37</sup> 国防医学院院史編纂委員会 (1995) による。ただし、鄔 (2003 : 51) では戴氏が学長となっていた期間は 1922~1923 年とされている。

		細菌学教授、董道蘊と李鼎勳を内科教授。
	1936	・軍医学校と改称。
	1937	・学長が蒋介石（日本（陸軍士官学校）留学 <sup>38</sup> ）。蒋は1947年まで学長をやっており、その後、日本留学の学長が出なかった。 ・戦争のため、校舎が広州、桂林、安順など転々と移転させられたが、実験室や図書館などの施設の修整、教学病院や臨床教学センターという人員養成の機構も怠らずに設立するようにされていた。
・帝大自身の付属病院が成立。	1938	
	1939	・生薬学科李承祐（日本留学）を教師。
・終戦。日本人が台湾から去るように。台北帝国大学から台湾大学と改名。初代の医学部部长は杜聡明（台湾人初の医学博士（京都大学）・帝大教授）。	1945	・終戦。日本が台湾を国民党政府に返還。
・巖智鍾は1月より台湾大学医学部教授兼細菌科主任、8月に兼台湾大学医学部代理学部長、医学部制度の革新に力を入れた。	1947	・軍医学校、戦時衛生人員訓練所などの13単位が国防医学院として上海で合併。
・杜聡明は再び台湾大学医学部部长。	1948	
	1949	・国防医学院は国民党政府に従い、台湾に移転。 ・巖智鍾は医学生物形態科細菌学組教授となった。
・巖智鍾は台湾大学医学部教授、また医学部行政の仕事に携わるようになっていた。	1952	

<sup>38</sup> 蒋介石の陸軍士官学校の留学は虚偽だという説もある。